★私的災難・・・・

医者の不養生・・・。
東部大会の前日の木曜、倦怠感と発熱に襲われた。
「あれ・・・？この感じはなんだ？インフルエンザほどの高熱でもないし
・　・・・感染症の兆候だが・・・・咽喉（いんとう・のど）は痛くない
・　・・・また副鼻腔炎か？・・・いや、口蓋（こうがい）は痛くないしなあ・・・・」

先月、近所の耳鼻科で「なんだ、のもと先生！副鼻腔炎だーなー」と、
冷やかされて落胆したばかり。
翌日になっても熱感は増すので、「もしかしたら・・・」と皮膚科を受診。
今度は若い皮膚科医に「あ～・・・せんせい～疲れてますね～。
うん、抗生剤点滴しまーっす！」・・・・がーん！
・・・それ以来、１週間連続で、昼休みに融通を図ってもらい点滴に通う羽目になった。
３月、４月の新規医療改革で日本中の病院はひっかきまわされている。「医療改革」とうより「改悪」なのは新聞で知っての通りだ。（そんなことをここで書いても仕方ない・・・）
疲労にる免疫低下で関節が化膿
・・・また抗生剤の世話になってしまう。

したがってじつに８年近く経つであろうか・・・
自宅病床で嵯峨根先輩からのメール速報で東部大会を見守ることとなった。

★東部大会とは？

インターハイにつながる最初の試合とはいえ、陸上王国埼玉にあっても
「東部」は激戦区なのだ。大会記録にも、歴代の全国入賞者の名が数多く並ぶ。

春高も３０年前までは東部常勝高校であったのだが、
学校数の倍増と共に競技人口は急増し、総合順位争いは激化した。

１９８０年代後半から９０年代にかけての「超・過密・激戦時代」は入賞は困難を極めた。
当事の東部大会のレベルは、今の県大会以上であったかもしれない。

マイルの決勝は３分２０秒が目安であったり、
ハンマー投げの東部の６人がインターハイに全員入賞という快挙もあったくらいだ。

加えて我が校は受験というラインをクリアしなければ、

中学時代いかなる好記録を持った選手であっても入学はできない。
奥岡、後藤のような全中のスター選手も学業基準を満たして入学してきた。
制度上、例外はない。

したがって、入学者の競技能力、総合チーム力は半ば「運」に左右されるのだ。

こういった特異な環境で、歴代の監督達は苦慮工夫し、総合入賞を守ってきた。
中には全国で入賞することもあるし、県大会入賞ゼロだってある。

★ 全員得点を目指す

大会は雨、風ともに最悪のグラウンドコンディションとなった。

記録は到底望めない。ホームストレートは常に５mの向かい風。長距離は風にあおられ、向かい風と追い風の繰り返しでスタミナを過剰にロスするであろう。跳躍は踏切が全く合わないし、空中でバランスを大きく崩すのは明白。したがって、勝負のみに集中する大会となった。

三日目の朝の段階で、総合の行方は東校の２・５点優位。
東のハンマーと、春高の三段跳びに焦点が集まった。
東のハンマーは素晴らしく、１・２・４位で２０点をたたき出した。
三段跳びは春高が１・４・６で１６点。
前田は最終跳躍で一度逆転されたが、再度逆転優勝を決めるという大ジャンプを見せた。
追い風参考ではあったが１４mの大台についに到達した。
キャプテンとして「男」を魅せた。

奮起した１１０mHは２・５・７位に入り、東校をリードした。

副将・横山の頑張りも注目だった。二日目の５０００mで、
横山は８位と０．１５秒の大接戦で惜しくも９位。

横山は涙を流した。

しかし、その姿をチームメイトは目に焼き付けていた。

みなの集中力が高まった。

三日目の３０００ｍＳＣの横山は、意地の快走を見せた。

２組タイムレースの３０００ＳＣ。横山は２組を走り、
断然トップでゴール。
同組の２位に２０秒という大差をつけ、
１，　２組合わせて見事５位入賞！２位の丸山と合わせて
１１点をたたき出した。

昨日の悔しさを晴らして見せた。
１組目に走っていればさらに上位を狙えたであろう。

県大会が楽しみだ。

★マイルで決まる
本来２００ｍで８点を期待されながら故障に泣いた山崎のマイルリレーを、
誰が埋めるかが大きなターニングポイントになった。

マイルで東校に５点差がつくと逆転されてしまう。

その重大な責務を担ったのは、
スプリンターでなく高跳びの山本であった。

１年生の野村を３走に配して東との間に５人離されなければ勝てる。

・・・・結果、東校が２位、春高６位。まさに薄氷を踏む思いで
０．　５ポイント差を守り抜いた。

「勝った！！」嵯峨根さんから、リアルタイムの電話が入った。

総合で０．５点差・・・つまり誰か一人でも順位をひとつ落とせば
逆転負けというシビアな闘いだ。

山崎が２００ｍで故障棄権せず、完走してくれたことで１点がとれるのだ。
主将　前田が高跳びで１ｍ６５ｃｍを一回で越えてくれて６位タイになれたから
ポイントが増えた。二回目に越えていたら８位だった。

このようにすべての種目で、各選手が限界の順位に入れたことが、総合優勝につながった。

大塚監督は、あえて最終日に「１点レベルの僅差の勝負」と
選手にプレッシャーをかけたのだという。
それに応え、見事に乗り越えてみせた春高陸上部員たち。

これは大きな励みと自信になったはずだ。

新人戦から比べれば総合で２０点もの増加。

監督の的確な指導の下、選手が研鑽した結果だ。
個人的にも、思いは様々であろう。

一昨年、後藤、石川、田中らとインターハイを経験し
ている山崎は、県での雪辱に燃えるだろう。

競歩で高島の背中を昨年追い続けた青山は、
今年は自分が栄光のゴールを切りたい。
この風の中、タイムも１分という大幅更新を見せ、自信をつけたのではないだろうか。

昨年、新入生でいきなり５０ｍを越えた槍の黒須は、順当に記録更新をし続けている。
常に安定した投擲を見せるので、大負けしない安心感がある。

過去に東部では１点差で惜敗したことも幾度もあった。
同様に僅差で勝った事もあるのはもちろんだ。

東部に限らず、９０年の部史があれば春高は県、関東でも０．５～１点差で
明暗を分けた経験がある。
大塚監督が春高二年生の関東大会も、１ポイント差で総合タイトルを逃している。

しかしそれはどの学校にもあてはまる事。

どのチームも必死だが、今回は春高に「勝利の神」が微笑んでくれた。

これは日々競技に励んでいるチームのみが参加できる充実した戦いなのである。

３へ続く

筆　撮　３７回　のもと歯科